

食物アレルギーのセルフケアとピアサポートに関する 発達段階別到達指標の提案

新宅由実子 ・ 上村 弘子* ・ 津島 愛子* ・ 高瀬 淳*

食物アレルギーのある子が健康で安全に過ごすためには、本人が必要なセルフケアを身に付けることに加え、周囲の子が食物アレルギーについて理解し、適切に支援できる環境づくりが重要である。そのため、食物アレルギーに関する指導は、食物アレルギーのある子だけでなく、ない子に対しても発達段階に合わせて実施することが求められる。

そこで本研究は、各発達段階で子供に必要なセルフケアとピアサポートのスキルを包括的かつ具体的に整理し、指導の一助となる「食物アレルギーのセルフケアとピアサポートに関する発達段階別到達指標」を提案する。指標の作成時には、教員が疾患の特徴や子供の実態を踏まえて指導するため、学校生活における具体的なスキルとなるように表現を工夫した。

Keywords：食物アレルギー，発達段階，セルフケア，ピアサポート，慢性疾患

I. はじめに

食物アレルギーの有病率は増加傾向にある¹⁾。また、食物アレルギーによる死亡事例もあるため、学校現場においては、教職員が緊急時に適切に対応できるよう研修を行う等ガイドラインやマニュアルの整備と徹底が進んでいる^{2) 3)}。食物アレルギーに関する子供への指導については、例えば東京都調布市⁴⁾は食に関する指導の全体計画に食物アレルギーの内容を盛り込み、食育を通して、子供が身に付けるべき力を発達段階に応じて明確にしたり、食に関する検討委員会を設置し、子供の自己管理能力を高めるために教員の指導力を向上させたりとしている。また新潟県⁵⁾は、食物アレルギーについての学習の位置づけを行い、特別活動や家庭科等の学習指導要領に基づいて指導できるとしている。先行研究においても、食物アレルギー教育の実践報告から、子供の知識・意識・行動への影響は明らかになって

いる⁶⁾⁻⁸⁾。

一方、教員には学習指導要領や指導計画のみならず、目の前の子供の実態に合わせてカリキュラムマネジメントすることが求められている。特に食物アレルギーを含む疾患に関する教育は、個人のプライバシーや人権にもかかわる繊細な課題であり、より各地域や学校、子供の実態に合わせて工夫する必要がある。そのため、指導方法や指導内容とともに、各発達段階で必要なスキルについて、子供の姿レベルで包括的かつ具体的に整理しておくことが必要である。

食物アレルギーは耐性を獲得する場合もあるが、そうでない場合には生涯付き合っていく必要のある慢性疾患である。学校の管理下を離れても子供が、健康で安全に過ごすためには、食物アレルギーのある子が自ら対応できる（セルフケア）力を身に付けること、周囲の子がそうした状況を受けとめ、必要

兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科（博士課程）673-1494 加東市下久米942-1
岡山大学教育学部附属幼稚園 703-8281 岡山市中区東山2丁目9-20

*岡山大学学術研究院教育学域 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

The Proposal of Developmental Stage-Specific Achievement Indicators for Self-Care and Peer Support in Food Allergy Management

Yumiko SHINTAKU, Hiroko KAMIMURA*, Aiko TSUSHIMA*, and Atsushi TAKASE*

Graduate School of Education, Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume, Kato 673-1494

Faculty of Education, Okayama University Attached Kindergarten, 2-9-20 Higashiyama, Naka-ku, Okayama 703-8281

*Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

に応じて支える（ピアサポート）力を付けることが重要である。また、周囲の子が食物アレルギーについて理解する過程で、自分が食べる物に関心を向ける機会があることや自分の体調不良時に初発のアレルギー発症を疑うことができること等は、その子のセルフケアにもつながっている。

そこで本研究では、食物アレルギーに関して各発達段階で子供に必要なセルフケアとピアサポートのスキルを包括的かつ具体的に整理し、指導の一助となる「食物アレルギーのセルフケアとピアサポートに関する発達段階別到達指標（以下、セルフケア・ピアサポート到達指標とする。）」を提案する。

II. 用語の操作的定義

1) 発達段階別到達指標

本研究の「発達段階別到達指標」とは、発達段階に応じて必要なスキルを包括的かつ具体的に整理した指標である。この指標は、教員が疾患の特徴や子供の実態を踏まえて、発達段階に応じた教育を実践できるようにすることを目的としている。

2) セルフケア

一般的にセルフケアとは、個人が自らの健康に関する問題に対して、主体的に行う活動のことを指す⁹⁾。セルフケアの範囲は、健康促進、病気の予防と管理、セルフメディケーション、家族の介護、必要に応じた病院又は専門家の受診やプライマリケアの利用とリハビリテーションを含む¹⁰⁾。オレムのセルフケア理論も踏まえながら、本研究における「セルフケア」は、自分の心身の健康をより良い状態に保つための行為や、周囲の支援を受けながら行動を調整する活動とする。また、それに伴う思考・判断・意思決定といった知的活動も含む^{11)~13)}。

3) ピアサポート

日本ピア・サポート学会は、ピアサポートを「仲間や同輩が相互に支え合い課題解決する活動」としている¹⁴⁾。仲間や同輩の定義やサポートの解釈は多様であるが、本研究における「ピアサポート」は、同じ学校に通う子供同士が食物アレルギーに対する理解を基盤とし、その疾患を患う子供を必要に応じて支える活動として位置づける。

III. 方法

1) 食物アレルギーのある子の自立度確認シートの作成

日本小児看護学会では、小児慢性疾患児の自立支援に資する環境整備を図る一助として、慢性疾患児の自立度確認シート¹⁵⁾を提示している。このシ-

ートは、慢性疾患児に限らず克服していかなければならない発達課題を基盤に置き、その上で慢性疾患特有の影響を乗り越えられるよう、それぞれの発達段階に対応して、自立に向けた取り組み状況を査定できるようにになっている。本研究では、各発達段階の子供の姿が包括的に整理されているこの慢性疾患児の自立度確認シートを参考にして、幼児期から思春期までの食物アレルギーに関するセルフケアの自立度確認シートを作成した。

2) 食物アレルギーのセルフケアとピアサポートに関する発達段階別到達指標の作成

国立情報学研究所が提供するCiNii Researchを用いて、先行研究を検索した。「食物アレルギー セルフケア」9件、「食物アレルギー 自己管理」11件が該当したため、合計20件の学術論文を分析対象とした。

これらの対象論文から、各発達段階における具体的なセルフケアおよびピアサポートに関する必要なスキルを抽出し、「幼稚園」「小学校低学年」「小学校高学年」「中学校」の4つの発達段階に照らして、セルフケア・ピアサポート到達指標として整理した。スキルの表現については、実際に児童生徒等の指導に使用する教員が理解しやすいように、学校保健の専門家1名と筆者で、具体的なスキルとなるよう表現を工夫した。

IV. 結果

表1に、慢性疾患児の自立度確認シートのうちセルフケアに注目して、幼児期から思春期までの慢性疾患児の姿を抜粋したものを示す。

食物アレルギーある子の自立度確認シートを表2に示す。下線部が変更した箇所である。

セルフケア・ピアサポート到達指標を表3に示した。発達段階を「幼稚園」「小学校低学年」「小学校高学年」「中学校」4期に設定した。セルフケア・ピアサポートのスキルについて「全員に共通して必要な自分と周りの人の身体を大切にする力」「食物アレルギーのある子に必要な体質や症状に合わせて対応する力」を枠組みとした。

「全員に共通して必要な自分と周りの人の身体を大切にする力」は「体調不良時の対応」「食事の対応」に分類した。「食物アレルギーのある子に必要な体質や症状に合わせて対応する力」は「基本的な知識」「食事の選択」「アレルギーの受容」に分類した。両方の力に重複するスキルを「集団生活を送る上で必要なスキル」とした。

表1 本人のセルフケアに注目した慢性疾患児の自立度確認シート

	A.コミュニケーション	B.疾患の理解	C.自己管理（セルフケア）の促進	D.自己決定能力の育成	E.児童の社会参加と関連機関との連携
幼児後期	<input type="checkbox"/> 医療従事者が患者に語る言葉や話を、関心を持って注意して聞くことができる	<input type="checkbox"/> 自分の体、体調、疾病に関心が持てる <input type="checkbox"/> 生活の中で自分に必要な療養行動や医療的ケアを知っている	<input type="checkbox"/> 体の不調を訴えることができる <input type="checkbox"/> 病状と年齢に見合った基本的な生活習慣が獲得できている	<input type="checkbox"/> いくつかの選択肢の中から方法を選ぶことができる	<input type="checkbox"/> 集団生活を楽しく過ごすことができる <input type="checkbox"/> 集団生活の場で自分の体の不調を訴えることができる
学童前期	<input type="checkbox"/> 感じたこと、考えたこと、したいこと、してほしいことなどを医療従事者に話すことができる	<input type="checkbox"/> 自分の体のどの部分に疾病があるか知っている <input type="checkbox"/> 疾病によって、どのような症状がでるか知っている	<input type="checkbox"/> 生活上、体調面での注意することを知って、必要な時には援助を受けながら療養行動がとることができる	<input type="checkbox"/> 自分の考えや意思を伝えることができる <input type="checkbox"/> いくつかの選択肢を自分で考えることができる	<input type="checkbox"/> 学校生活の場で療養上、必要な時には援助を求めることができる <input type="checkbox"/> 遠足等の体験活動に参加できる
学童後期	<input type="checkbox"/> 疾病について医療従事者と話し合うことができる	<input type="checkbox"/> 人の体のつくりと働き、疾病の状態について知っている <input type="checkbox"/> 疾病について理解し、必要な療養行動について知っている	<input type="checkbox"/> 病状と年齢に見合った規則正しい生活習慣が獲得できている <input type="checkbox"/> 必要な療養行動をとることができる	<input type="checkbox"/> 必要な療養行動について自分の意思で決めることができる	<input type="checkbox"/> 学校生活の場で体調管理や必要な療養行動は自分で判断して行うことができる <input type="checkbox"/> 集団宿泊的行事等に参加できる
思春期	<input type="checkbox"/> 学校生活、療養生活、将来への夢などについて医療従事者と話し合うことができる	<input type="checkbox"/> 疾病について理解した上で、適切な療養生活について知っている <input type="checkbox"/> 疾病の進行の防止に必要な生活様式を知っている	<input type="checkbox"/> 適切な療養生活を継続できる <input type="checkbox"/> 体調や症状を継続的に把握できる	<input type="checkbox"/> 適切な療養生活について自分の意思で決めることができる	<input type="checkbox"/> 慢性疾患にかかっている児童同士の交流の機会に必要なに応じて参加できる <input type="checkbox"/> 自分の疾病について親しい友人に話すことができる <input type="checkbox"/> 自分らしくいられる場所がある

注：参考文献（15）から、本人のセルフケアに注目して筆者が抜粋し作成した

V. 考察

1) セルフケア・ピアサポート到達指標提案の意義

慢性疾患を抱えている子供は、学校生活を送る上で支援を必要としている^{16) 17)}。本研究においては、近年有病率が増加傾向にあること、発症時には命に危険が及び実際に学校で死亡事故が起きていること、教員の関心も高まっていることから、慢性疾患のうち食物アレルギーを取り上げて検討した。

及川¹⁸⁾は「おおよその目安として発達段階を示しているが、子どもの発達のみならず発症時期なども考慮して、最初の段階から確認することも必要である」としている。そのためセルフケア・ピアサポート到達指標では、幼稚園から中学校までの具体的な発達の過程を見通せるようすることで、教員が学年に合わせるのみならず、目の前の子供の実態に

合わせてカリキュラムマネジメントできるようにしている。

2) セルフケア・ピアサポート到達指標の特徴

生涯を通じて子供が、健康で安全に過ごすためには、食物アレルギーのある子が自ら対応できる力を身に付けること、周囲の子がそうした状況を受けとめ、必要に応じて支える力を身に付けることが重要である。セルフケア・ピアサポート到達指標の中心には、ピアサポートのスキルとして「集団生活を送る上で必要なスキル」を示している。例えば、食物アレルギーのある子が食べられない物を友達から勧められたときに、断る言い方を工夫するのと同時に、周囲の子は、自分に食物アレルギーがあるかどうかにかかわらず、勧めたものを断られることがあると理解できることが必要である。学校では食物アレル

表2 表1から食物アレルギー用に改変した慢性疾患児の自立度確認シート

	A. コミュニケーション	B. 疾患の理解	C. 自己管理（セルフケア）の促進	D. 自己決定能力の育成	E. 児童の社会参加と関連機関との連携
幼児後期	<input type="checkbox"/> 教員が語る言葉や話を、関心を持って注意して聞くことができる	<input type="checkbox"/> 自分の体、体調、疾病に関心がもてる <input type="checkbox"/> ・アレルギーを自分で <u>言える</u> ・園で <u>気を付けること</u> が分かる ・発症時には、 <u>薬を飲む</u> 等の対応をすることが分かる	<input type="checkbox"/> 体の不調を訴えることができる <input type="checkbox"/> 病状と年齢に見合った基本的な生活習慣が獲得できている	<input type="checkbox"/> アレルゲンを含まないものの中から、自分で <u>食べるものを選ぶ</u> ことができる	<input type="checkbox"/> 集団生活を楽しく過ごすことができる <input type="checkbox"/> 集団生活の場で自分の体の不調を訴えることができる
学童前期	<input type="checkbox"/> 感じたこと、考えたこと、したいこと、してほしいことなどを教員に話すことができる	<input type="checkbox"/> 食物アレルギーがあることを知っている <input type="checkbox"/> 自分が発症した時の症状を知っている	<input type="checkbox"/> ・食事以外の場面を含む生活上で <u>気を付ける</u> ことが分かっている ・体調がすぐれない時にはいつも以上に、 <u>アレルゲンに気を付ける</u> ようとする ・発症時には <u>援助を受けながら</u> 服薬できる	<input type="checkbox"/> 自分で <u>食べたいもの</u> を選んで、 <u>食べられるか</u> 保護者と相談できる <input type="checkbox"/> いくつかの選択肢を自分で考えることができる	<input type="checkbox"/> 周りの子から質問された時には、 <u>自分なりの言葉で食物アレルギーの</u> ことを伝えられる <input type="checkbox"/> 遠足等の体験活動に参加できる
学童後期	<input type="checkbox"/> 食物アレルギーについて教員と話し合えることができる	<input type="checkbox"/> 食物アレルギーの <u>仕組み</u> を理解している <input type="checkbox"/> 食物アレルギーについて理解し、必要な療養行動について知っている	<input type="checkbox"/> 病状と年齢に見合った規則正しい生活習慣が獲得できている <input type="checkbox"/> ・食事以外の場面を含む生活上で <u>気を付けて</u> 過ごせる ・体調がすぐれない時には、 <u>大人と相談しながら</u> 自分で活動を調整できる	<input type="checkbox"/> ・自分で <u>食べたいもの</u> を選んで成分表を確認し、 <u>大人に見守られながら</u> 判断できる ・活動の参加の仕方を自分で工夫し提案できる	<input type="checkbox"/> 必要に応じて、 <u>食物アレルギーについて適切に</u> 配慮を求めることができる <input type="checkbox"/> 集団宿泊的行事等に参加できる
思春期	<input type="checkbox"/> 学校生活、食物アレルギーに対応した生活、将来への夢などについて教員と話し合えることができる	<input type="checkbox"/> 食物アレルギーについて理解した上で、適切な療養生活について知っている <input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/> 友人関係が広がっても <u>食物アレルギーに気を付けた</u> 生活を継続できる <input type="checkbox"/> 体調や症状を継続的に把握できる	<input type="checkbox"/> 自分で <u>食べたいもの</u> を選んで成分表を確認し判断した上で、 <u>教員に</u> 確認できる	<input type="checkbox"/> 食物アレルギーがある子同士の交流の機会に必要なに応じて参加できる <input type="checkbox"/> 自分の <u>食物アレルギー</u> について親しい友人に話すことができる <input type="checkbox"/> 自分らしくいられる場所がある

注：参考文献（15）を参考に、筆者が食物アレルギー用に改変し作成した

ギーのある子とない子が一緒に生活しており、実生活を通じて、食物アレルギーのある子のセルフケアと周囲の子のピアサポートを同時に育てていくことができる。また、周囲の子が食物アレルギーのある子を支えるために、食べられないものがある子があると学ぶ機会を得ることや、自分が食べているものに何が含まれているか知る機会を得ることは、自分

の体調不良時に初発のアレルギー発症を疑うことができたり、自分の食べている物と健康のつながりについて意識できたりして、セルフケアを身に付けることにつながっている。このように、セルフケアとピアサポートは一体的なスキルであり、今回1つの指標にまとめられたことは、セルフケア・ピアサポート到達指標の特徴であると考えている。

表3 食物アレルギーのセルフケアとピアサポートに関する発達段階別到達指標

		食物アレルギーのある子に必要な体質や症状に合わせて対応する力				
全員に共通して必要とする力		集団生活を送る上で必要なスキル	基本的な知識	食事の選択	アレルギーの受容	
幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の体調を説明できる (例：元氣、頭が痛いなど) 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分に出された食事を間違いないで食べる 	<ul style="list-style-type: none"> ・食べられないものがある子がいると知っている 	<ul style="list-style-type: none"> ・アレルギーを自分で言える ・発症時には、薬を飲む等の対応が必要だと知っている 	<ul style="list-style-type: none"> ・アレルギーを含まないものの中から自分で食べられるものを選ぶことができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・アレルギー対応に起因する気持ちを素直に表出できる (例：アレルギーだと知っていたとしても、食べてみたいと言えぬ)
小学校低学年	<ul style="list-style-type: none"> ・体調が優れないことを自覚できる ・体調不良時には、無理をしない 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が食べているものに何が含まれているのか知ろうとする 	<ul style="list-style-type: none"> ・対応食等を見て、疑問に思った時には、なぜ自分と違うのか質問できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・平常時には、発症時の症状を自分で説明できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で食べたいものを選んで、食べられるか保護者と相談できる ・成分表や詳細献立を保護者と一緒に確認する 	<ul style="list-style-type: none"> ・アレルギーは生活習慣と関係ないことが分かる
小学校高学年	<ul style="list-style-type: none"> ・体調が優れない時は、大人と相談しながら自分で活動を調整できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・落としたり、こぼしたりしないように配膳できる ・おかわりのルールが分かる 	<ul style="list-style-type: none"> ・食物アレルギーを有する人がいるか、も知れないと考える ・勧めたものを断わられることがあると理解できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・アレルギーの仕組みを理解している 	<ul style="list-style-type: none"> ・成分表や詳細献立を確認し、まずは自分で食べられるかを判断できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が我慢することではなく、解決するのはなく、必要に応じて自分の気持ちを伝えることができる
中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・体調や症状を継続的に把握している 		<ul style="list-style-type: none"> ・自分で症状や必要ない配慮、緊急時の対応を伝えられる 	<ul style="list-style-type: none"> ・発症時には服薬やエピペン投与のタイミングを判断できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・医師からの指導を踏まえて、成分表を自分で確認し食べられるかを判断する ・自分の判断の内容を説明する 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分にアレルギーがあることを受け止めて、将来について前向きに考えられる

3) セルフケア・ピアサポート到達指標の内容

成田ら¹⁹⁾は、アレルギー疾患共通の課題として、保護者による治療から患者主体の治療への移行を挙げている。思春期に入ると保護者の指示に反抗しがちになるとして「むしろ理解力が発達し自立心の芽生える小学校低学年ごろから、年齢に応じた疾患理解や自己管理を積極的に促すことにより、治療やセルフケアを習慣化することが大切である」としている。校種ごとにセルフケア・ピアサポート到達指標を分けるのではなく、幼稚園教諭や小学校教諭も、思春期までを見通すことによって、適切な時期に必要な指導を行えるのではないかと考えた。

また、湯口ら²⁰⁾は食物アレルギーの診断を受け外来通院中の小学生とその養育者に半構造化面接を行い、小学校の低学年群と高学年群を比較している。低学年群では原材料表示を読めないで母親に頼るが、高学年群では自分で読むこと、エピペンは低学年では注射だというイメージがあるのみだが、高学年群では使用手順を知っていること、ただし使用のタイミングを知っている子は少なく、使用のタイミングについて正確な知識がある子でもアナフィラキシーの状態では自分でエピペンを使うのはむずかしいと認識していることなどを明らかにしている。この調査の対象は小児科アレルギー外来に通院している子であり、学校現場で接する場合がある正確な診断を受けていない子や通院をしていない子と比べると、専門的な医療を受けていることで、発達段階に合ったセルフケアを身に付けていることが考えられる。そこで、食物アレルギー対応に必要な力として、低学年には“成分表や詳細献立を保護者と一緒に確認する”，高学年には“成分表や詳細献立を確認し、まずは自分で食べられるかを判断できる”，中学校には“医師からの指導を踏まえて、成分表を自分で確認し食べられるか判断する”を追記した。エピペンに関しては“発症時には服薬やエピペン投与のタイミングを判断できる”を追記した。

さらに「高学年群では友達との食行動を伴う付き合いにおける気遣いがあり、勧められたお菓子を断る時に相手が嫌な思いをしないよう工夫していた」ことも明らかにしている。「学童期の子供にとっての食行動は栄養摂取以外の意味も大きい」。この点については、小児アレルギーエデュケーターである金子²¹⁾もセルフケア能力を引き出すために「社会的スキルへの支援として、一緒に食事をする仲間に食物アレルギーがあることを話す方法を親子と一緒に話し合う」としている。これらのことから、食物アレルギーのある子が心身ともに健全に発達するために段階的に必要な力を身に付けることと同時に、

周りの子がそれを理解し支えることが重要であることが分かり、セルフケア・ピアサポート到達指標上にはセルフケアとピアサポートの両方を整理した。

さらに、セルフケア・ピアサポート到達指標は指導に際して子供の実態を見取ったり、指導計画や指導内容を検討したりする際の一助になればと考え作成している資料である。教員が読みやすく、書いてある内容をスムーズに理解し、すぐに学校現場で活用できるよう、学校保健の専門家とともに内容を精選し、表現も工夫した。例えば、「原材料表示を確認する」という表現から、学校の給食場面を想定して「成分表や詳細献立を確認する」とした点である。

VI. 研究の限界

1) 全ての子供に健康で安全な学校生活を保障するための条件整備の一部分であること

それぞれの慢性疾患に特徴があり、慢性疾患児本人に必要な力や周囲の子に必要な力は、今回検討した食物アレルギーに関するスキルと同じ部分と異なる部分があると考えている。教員が、慢性疾患児を取り残さず、全ての子供に健康で安全な学校生活を保障するための指導を実施するためには、学習計画や指導案のみならず、具体的でわかりやすい資料が必要であり、今回まずは、食物アレルギーを取り上げて検討を行った。しかしながら、先に述べたように各慢性疾患には、それぞれの特徴があるため本研究を参照しながら、今後も全ての子供に健康で安全な学校生活を保障するための検討を続けていきたい。

2) セルフケア・ピアサポート到達指標の内容妥当性

本研究で提案するセルフケア・ピアサポート到達指標は、日本小児看護学会が作成している慢性疾患児の自立度確認シートを参考に、筆者が先行研究から各発達段階における具体的なセルフケアおよびピアサポートに関する必要なスキルを抽出し、4つの発達段階に照らして整理し、作成したものである。子供の姿レベルで包括的かつ具体的に必要なスキルを整理した資料を作成することができたと考えている。しかしながら、学校現場で活用するための資料として、内容が妥当であるかについては、今後も学校現場の教員や管理職等の意見を踏まえながら、さらに検討していく必要がある。

VII. 引用文献

- 1) 日本学校保健会：令和4年度アレルギー疾患に関する調査報告書, 学校調査, 15-50, 2023
- 2) 文部科学省：学校給食における食物アレルギー

- 対応指針, 食物アレルギー対応委員会, 5-12, 2015
- 3) 日本学校保健会: 学校のアレルギー疾患に対する取り組みガイドライン(令和元年度改訂), 第1章総論～「学校生活管理指導表(アレルギー疾患用)」に基づく取組～, 7-30, 2020
- 4) 東京都調布市: 調布市立学校食物アレルギー対応マニュアル(令和6年3月改訂), 第5章給食指導, 36, 2024
- 5) 新潟県: 学校における食物アレルギー対応指針(令和2年9月現在), I-7食物アレルギーに関する指導, 17-18, 2020
- 6) 大沼久美子, 菅原美佳: ヒヤリ・ハット事例を活かしたアクティブ・ラーニング型食物アレルギーリテラシー教育の開発—小学生を対象に—, アレルギーの臨床40, 67-72, 2020
- 7) 齋藤久美, 戸部秀之: 「行動変容を促す健康教育プラン」の作成と健康教育への活用—養護教諭の特性に焦点をあてて—, 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要15, 23-30, 2016
- 8) 山城綾子, 竹鼻ゆかり: ピアサポートによる食物アレルギーのある中学生の自己管理行動の促進—修学旅行の事前指導を通して—, 日本健康相談活動学会誌11, 46-58, 2016
- 9) 鈴木肇: 『医学大辞典』1422, 南山堂, 1954
- 10) WHO: 健康とウェルビーイングのためのセルフケア導入に関するWHOガイドライン <https://www.japan-who.or.jp/wp-content/themes/rewho/img/PDF/library/reports/2402wgschwab.pdf> (2024年11月24日閲覧)
- 11) ドロセアE.オレム訳小野寺杜紀: オレム看護論看護実践における基本概念第3版, 149-182, 1995
- 12) 都留伸子: 看護理論家とその業績第2版, 180-197, 1995
- 13) 松本光子: 看護MOOKNo.35 看護理論とその実践への展開, 63-72, 1990
- 14) 日本ピア・サポート学会: ピア・サポートの理念 <http://www.peer-s.jp/idea.html> (2024年11月23日閲覧)
- 15) 日本小児看護学会: 慢性疾患児の自立度確認シート https://jschn.or.jp/care_manual/ (2024年11月23日閲覧)
- 16) 石見幸子, 鬼頭英明, 中村朋子: 慢性疾患のある児童生徒が学校生活を送るための効果的な支援のあり方, 小児保健研究73, 860-868, 2014
- 17) 原加奈, 飯村直子, 金丸友, 西田志穂, 杉本晃子, 吉野純, 西村実希子, 三池純代: 学校生活を送る慢性疾患児の子どもへの支援に関する文献検討, 日本小児看護学会誌31, 103-108, 2022
- 18) 及川郁子: アレルギー疾患をもつ子どものケア—子どもの自立支援に向けて—, 日本小児臨床アレルギー学会誌17, 1-7, 2019
- 19) 成田雅美, 大矢幸弘: 小児アレルギー疾患の移行期医療—患者・家族に最善の医療, 医学のあゆみ267, 305-310, 2018
- 20) 湯口梓, 佐藤奈保, 中村伸枝, 山出史也: 食物アレルギーをもつ学童のセルフケアの実際と子どものセルフケア拡大に向けた養育者のかかわり, 日本小児臨床アレルギー学会誌19, 267-276, 2021
- 21) 金子恵美: 食物アレルギーがある子どもへのセルフケア能力を引き出すケア, 小児看護45, 307-311, 2022